異賊防禦の策　　日本の名著31、吉田松陰、中央公論社

《解説》「異賊防禦の策」は、『未忍焚稿』に収められた一文で、弘化三年閏五月十七日の作である。『未忍焚稿』（いまだ焚くに忍びない文稿の意）は、松陰が十六歳の弘化二年（一八四五）から二十一歳の嘉永三年（一八五〇）までの文章を集めたものである。この時期、松陰は、杉家・玉木家にあって、兵学師範たるべく修行中であった。

『孫子』の兵法にいう、「戦争の原則は、敵が行動を起こしてこないことを頼りにするのではなく、わが方の備えが万全であることを頼りにする。また敵が攻撃してこないことを頼りにするのではなく、わが方の敵から攻撃されることのない態勢が万全であることを頼りにするのである」（九変篇）と。

今日の状勢をみると、ヨーロッパ列強の勢いがさかんで、はげしくあばれまわっている。わが方に、どのような準備があれば、安心してわが国の防衛を託すことができるであろうか。考えるに、四つのことがある。一は能力のある人物を抜擢し適所に配置すること。二は優秀で鋭利な武器を整えておくこと、三は兵士の訓練を適切な方法で実施すること、四は戦闘の攻撃や防禦の計略をたてることである。この四つのことは、国家の急務であって、一日として欠けることがあってはならないものである。

能力のある人物を抜擢し適所に配置するとはいったいどういうことなのか。答えよう。人には各自それぞれ長所とするところがある。その長所とするところをみて、それを活用するような職につけることである。温公（司馬光のこと。宋の政治家。『資産通鑑』二九四を著わす）がいうところの、徳行のある者は教育をつかさどり、学問にすぐれている者は君主の相談にあずかり、政治力がある者は地方長官となり、勇気があり計略に富む者は軍隊を統率する将軍となるというようなことが、そうである。

そして人物がなにに長じているかを知ろうと思えば、士に対し出題して論策を書かせ、それにより人材を登用するのがもっともよい方法である。論策は、ただ議論の内容が純粋で優秀であるのを採り、言葉のつくり方や修飾の上手下手にはこだわらない。

ある人が、「論策をもって士を登用しようと思っても、現在の世の中では、人物自体が不足しているが、これをどうすればよいのだろうか」と述べている。しかし、こうしたことをいうのは、その人が、上に立つ者が、賢材を重んじることを

実際に示せば、人材はかならずあらわれ、人物に不足することを嘆くようなことは決してない、ということを知らないからである。

昔、秦が亡びようとしていたとき、だれもかれも権力者にこびへつらって、人材があらわれなかった。こうしたとき、高祖（漢の初代皇帝、劉邦）が、赤いのぼり（漢の標識）をたてて挙兵するや、張良（韓の人。秦の始皇帝の暗殺に失敗したあと黄石公から太公望の兵書を授けられ、劉邦に協力して秦を滅ぼし天下を統一させ留侯に封じられた）、蕭何（江蘇沛県の人。高祖の天下統一に協力し鄭侯に封ぜられる）・韓信（江蘇淮陰の人。高祖に協力し楚王・淮陰侯に封じられた。のち謀反の嫌疑で呂后に殺された）の三傑らが続いて起こり、高祖を助けた。西漢が衰えると、だれもかれも王莽の新になびき従属した。このとき、光武帝が正義を唱えて挙兵するや、二十八人の将軍（後漢の光武帝を助けた功臣で、明帝のとき雲台に画かれた二十八人のこと）がこれに続いて起こり、光武帝を助けた。これはほかでもない、高祖や光武帝の賢者を重んずる精神が誠実であったからである。そして人材というのは、これを育成する道理と適切な方法があれば、かならず育つものである。

ある人がまた次のように述べた。「論策をもって士を登用すれば、その弊害が多くて、いちいち数えることができないことになろう。漢の武帝は、桑弘羊（前漢の政治家。武帝に仕え塩鉄の専売制や平準・均輪の法を立てた。昭帝のとき謀反を企て殺された）の興利の説を採用したが、そのため天下はさわがしくなり、末年には賊が起こった。また宋の神宗は、王安石の新法の提議を採用したが、その結果天下はさわがしくなり、国家も決して富強とはならなかった。これらは論策をもって人材を登用する弊害である」と。この人の考えもまた思慮が足らないというべきである。

いやしくも君主に仁義の心があれば、邪説がおこっても心配することはない。武帝・神宗の二君は、英明の資質があったけれども、外に対しては侵略の意図があり、内に対しては富強にしようとの欲があった。したがって、説に惑わされるところとなっただけである。もし君主が仁政を行なおうとすれば、人民に課する税を重くし、人民に対する徭役をきびしくすることは忍びえないであろう。もし君主が義（道理）をわきまえていれば、資産のない者から税を取るようなことはできないであろう。昔より、国家の害は、租税をきびしく取りたてることをもって最悪としている。したがって、君主に仁義の心があれば、邪説がおこっても心配することはないといえるのである。

優秀で鋭利な武器を整えておくこととはどういうことなのか。答えよう。武器は軍事上の一大威力である。したがって、「優秀で鋭利な武器が整っていなければ、戦いに敗れるのは必至であり、むざむざ兵卒を敵に与えるようなものだ」といわれる。現在は太平が長く続いていて、人々は戦乱を忘れ、武器を製造するのも、だいたいが商人にまかせており、武器の飾りの方を大事にし、精巧さ鋭利さは重視しない。もしいったん戦乱にぶつかると、武器が鈍重なので、結局は兵卒をむざむざ敵に与えることになってしまう。

趙常吉が、「武器を製造するのは、その武器を実際に使う人が造らなければ、精緻堅固な武器とはならない」と述べているが、まさに、そのことが今日の弊害である。役所の武器については、憂慮すべきは、ほとんどの役人がぼんやりしていて武器の製造や使用の方法を知らず、できるだけ武器の使用をひかえ、自由に使わせないので、武器はかえって鋭利さを失ってしまうということである。役人としては、適切に処置すべきことである。

およそ武器の鋭利さについてみれば、防禦用の武器は、ますます重厚であってこそいよいよ精妙といえ、戦闘用の武器は、ますます軽快であってこそ、いよいよ精妙といえよう。思うに、守備は、不敗の地に立って動揺しないことをもって主要とし、戦いは、敵の敗退をのがさず、自軍の変化を予測させないことをもって主眼とすべきだ。したがって、敵の侵攻を防衛するにあたっては、鉄砲の利点は、重く大きく遠くまで弾丸が飛ぶことにある。これもまたくわしく論じなければならないであろう。

兵士の操練を適切な方法で実施するとはどういうことなのか。答えよう。温公が、「兵士を養成する方法は、兵士が精鋭となることにつとめ、兵士がいたずらに多くなることをかならずしももとめない」と述べているが、精鋭な兵をつくるためには、操練がもっともよい方法である。さて操練の方法は、火器に長じている者をもって一隊とし、長槍や刀剣に長じている者をもって一隊とし、弓馬に長じている者をもって一隊とし、騎馬に乗って弓を射る方法を訓練する。兵士は幾千万人であっても、これを上記三隊に分け、一人とて精鋭でない兵士はいないようにする。春と秋には、大将の狩猟や漁撈に託して兵士を率いて操練を実施し、金鼓を打って進軍・退却を統制し、旗の動きによって、隊の合体や分離を練習し、数百の部隊を、あたかも一人の人間を使うように自由自在に動かせるようにする。戦闘の攻撃や防禦の計略をたてるとはどういうことなのか。答えよう。人材を登用し、操練に習熟し、武器が優秀で鋭利であれば、いよいよこれを実際の戦闘に

活用することになる。実践の方法は、敵が海上にあって陸から十七、八町（約二千メートル）ほど離れているくらいならば、大砲数筒でもって、この敵を防ぐ。十町以内に接近すれば、いわゆる数丸（かずだま）なるものをはげしくうち放って、敵が上陸できないようにする。屯丸（むらだま）というのは、数丸を一つの筒に装填するのをいうのである。そして着弾の範囲、射程距離は、広狭長短、意のままにできる。

戚子（戚継光。明の武将で、倭寇や北辺の防備に功績があった。兵書『紀効新書』十八巻などがある）が次のように述べている。「弓矢や火器のような類のものは、みな飛道具である。その威力が百歩にまで達することができるのを五十歩で発射し、威力が五十歩にまで達することができるのを二十歩で発射する。これも飛道具を短く使用する方法である。このようにすれば、使用する武器が飛道具であるから『勢いが激しく』、短い距離に用いるのであるから『瞬時の機をはずさず』、孫子の勢険・節短の説にかなうものといえる。」

この言葉はまことにもっともなことである。陸戦においては、海戦の方法を参考にして発砲する。しかし二、三間（四、五メートル）の近くまで迫れば、長槍や刀剣をもってはげしく刺し撃ち、馬上から弓を放って敵陣の背後や横を攻撃するのである。私が考えるのに、上古の制では、だいたい馬に乗って弓を射る方法を用いた。中古は馬を廃止して歩兵を用い、馬はただ行軍の用と大将や指揮官の愛用とにあてただけであった。この古い習慣が今日まで続き、騎戦に復帰することを論ずる者はいない。それゆえ、武士や馬が日に日に弱くなっていき、いまや戦闘に堪えないようになろうとしている。そのうえ、射術も衰え、武術の礼儀作法にこだわって、実用にはうとい。しかしながら、操練に時間をかけることができれば、古い時代の武術に復帰することも可能である。

四者（人材登用、武器鋭利、操練の実施、戦いの計略をたてること）がすでに備わってのち、軍備を拡張することができる。さらにこれに続いて、防塁を設置し、兵糧を蓄え支給し、軍馬を飼育することが必要である。

防塁を設置するとは、やはり古代の軍団のようにする。つまり、兵士がそれぞれ組をつくり組の長を置き、辺境や要衝の地にはとりでをつくり、ここにたてこもって守り、敵に対する防備が空白で敵から攻撃されやすい地点のないようにするのである。兵士の組編成の制度は、現在では、五人で伍（ご）を編成し、十人で火（か）を編成し、五十人で隊を編成する。百人で旅帥（旅団の指揮者）をおき、二百人で校尉（軍団の指揮者）をおく。しかしながら、以上は、民兵を団結させる制度である。兵士を団結させる制度は参考とするものがない。もっとも、その意味を

とって考えてみると、陪臣が多い者は隊長であり、少ない者は伍長である。

威元敬が、隊の仲間について論じたものに、「かならず、たがいによく知っている者を選べ、昼の戦闘には顔を見て友軍だと判断し、夜の戦闘では声を聞くだけで友軍だと判断できるからである」とある。隊の仲間を明確にしておくのは、人数の多少にかかわらず、たがいに親睦して、危急の場合の救援に都合がよいようにするためである。いったいに兵士が防塁に滞在する以上、事件がないときは兵法を講じ武芸を習うことを業務とし、病気や事故の場合のほかには、たやすくその任務を放棄することを許さない。防塁に滞在するのは一年を期限とする。滞在期間が非常に長いと倦怠の心配があり、非常に短ければ、防塁への往復が頻繁となり煩わしい。一年を期限とすれば、その中間の適当な交代に近いといえよう。

さて軍隊が数隊に分かれ、数方面から侵入してくる場合が、もっとも防ぎにくいのである。新田義貞が鎌倉を攻撃したとき、大館宗氏・沢田行義は極楽寺より、堀口貞満・大島守之は児嚢坂より、義貞・義助は仮粧坂より、兵を三方面に分けて侵入させ、鎌倉は陥落し、北条氏一族をことごとく討伐した。元は宋と同盟し、金をはさみ討ちにした。宋は金の東南部を囲み、元は金の西北部を囲み、金の君主を捕えて殺し、金は亡んだのである。これらが、軍隊が数方面に分かれて侵入してくるのを防ぐことはむずかしいというゆえんである。それゆえに、「防備が空白で敵が攻撃しやすい地点をなくする」といわれるのである。

兵糧を蓄え支給するとは、辺境の防塁にいる兵士に、食料をを支給することをいうのである。『孫子』にいう、「戦争のために国が貧しくなるのは、遠方まで食料や武器を輸送するからである。遠方まで食料や武器を輸送すれば、その任には人民があたり、また物資がそれだけ欠乏するのであるから、人民は貧困となる」（作戦篇）と。それゆえに兵糧を支給するにはなによりも便利さを選ぶべきである。まず兵士幾人に、もみ米が何石必要かを量り、本禄のもみ米を控除し、防塁の近辺からその分のもみ米を支給すれば、遠方に輸送する弊害をほぼ免れることができるのではないか。だいたい兵士一人の食糧は、一日にもみ米一升という計算をすれば、百人で一石である。百人が一日に一石を食べれば、一年に三百六十石となり、禄のもみ米百四十四石に相当する。その他は類推したらよい。また考えてみると、防塁の貯蔵のもみ米が二、三年分を支えるものでなければ、守備の任務に安心してあたるのに十分とはいえない。

宋の趙徳明が、人民が飢えに苦しんでいるので、君主に文書を奉じて、食糧を乞うた。そのとき、王旦がいうには、「徳明に詔して、臣（王旦）が述べたいと思

うことがあります。防塁にある貯蔵用のもみ米は与えることができない、しかし都にはすでに百万石を用意している、自分で人民たちを都に来させ用意のもみ米を持ち帰るようにさせるがよい、と伝えたいのです」徳明はこの詔をありがたく受けていうには、「朝廷にはすぐれた人物がいる」と。これをみても、貯蔵のもみ米が多くなければ、安心して守備の任務にあたることができないことが分かるのである。

軍馬を飼育するというのは、防塁の近辺において、民間に馬を飼育したいと願う者には、馬と飼育の費用を与えて飼育させることをいうのである。もとより兵士が飼育している馬だけで戦争には十分である。しかしながら、戦闘や防衛のさい死んだり傷ついたりしないわけにはいかない。それゆえ軍馬を民間に飼育させ、その不足分を補充するのである。しかしながらたくさん飼育すれば農耕に害がある。兵士百人に二、三十匹を飼えば足りるであろう。防塁にいる兵士にこの馬を調練させ、兵士が任務を完了して去るとき、監督官をして、その馬の肥え具合や調練の具合を検査させる。

軍馬の飼育・調練の方法については、『呉子』にくわしく論じてある（『呉子』は「魯で曾子に学んだといわれる呉起が、魏の文侯や武侯（文侯の子）の問いに対して攻防の法を説くという形で編纂されたもの。『孫子』に較べると格調が落ちるとされている。ここで引用されている一節は治兵篇にあり、武侯の問いに答えた形をとっている）。飼育を論じて次のようにいう、「飲食の適度をまちがってはならない」、またいう、「飲食の水と草とを適度にし、食の過不足を調節する」、またいう、「飢えのために身体をこわすことはない、かならず飽食により身体をこわすのだ」、またいう、「冬は厩舎（きゅうしゃ）を温暖にし、夏は涼しくする」と。調練を論じて次のようにいう、「調練では最後の困難な段階では身体をこわすことはないが、かならず最初のやさしい段階で身体をこわす」、またいう、「馬の目が前方だけしか見えないようにするとともに、耳は物音で驚くことのないようにし、速く走ることや前進・停止などをよく訓練し、人と馬とがたがいに親しんだのち、その馬は戦場で使用できるようになる」と。反復してよく考えれば、馬の飼育・訓練の方法は、上記の数言につくされているといえよう。

いったい馬の習性というものは、豆ともみ米のようなぜいたくな食事を与えれば、肥大となって軽快ではなくなり、はだはあざやかで美しいが弱体で力がなくなりやすく、遠くまで行けば、食欲が減退し、急疾走すれば、たちまち汗が流れる。

尉繚子（うつりょうし）は、よいことを述べている。すなわち、「現在では、金属や木の本性は

寒くはないのに、錦で飾った布を着せ、馬や牛の本性は草を食い水を飲むのに適しているのに、豆やもみ米を与えている。これは政治がその根本を失っているからである。このような過度のぜいたくは規制するべきである」と。

かってつぎのようなことを聞いたことがある。馬を調練するためには、春は遠くまで走らせ、夏は水を渡り、秋は狩猟をし、冬は馬を乗りこなす。ある一日は徐行し、他の一日は速足で走り、あるいはおおいに走り、あるいは左右に屈折して走り、ひと走りすれば止まり、一度緊張すればつぎはゆったりとさせ、あるときは夜間に乗馬し、あるときは雪の上を騎乗し、あるいは風雨のなかを走らせ、あるいは険しいところを通行させる、このように調練して一日とて休まなければ、馬はおのずから壮健である。そのうえ、人は馬の癖をよく知り、馬もまた乗る人の気持ちを理解する。このようにすれば、軍馬の用に役立つというのである。

三者（防塁を設置し、兵糧を蓄積、支給し、軍馬を飼育すること）が十分備わって、辺地の防衛がなりたつのである。七者（上記の三者と最初に記した人材登用、武器鋭利、操練の実施、戦争の計略の四者を合わせたもの）は一つも欠けてはならない。しかしながら、その根本をたずねれば、肝心なのは人材登用、適材適所にあるともいえる。人材が登用されるならば、他の六つの事柄もまた成功するであろう。さらにまたその根本をたずねれば、君主の仁義の心がすべてである。

『孟子』（離婁上篇第二十章）に述べられている、「君主が仁愛が深ければ、国中みな仁愛にあふれ、君主が義を重んずれば、国中の人もまた義を重んずるようになる」と。私は、このことを確信している。